



レポーター
中澤 弘さん
●アメリカ・ボルチモア在住

ボルチモアの「日本祭」

～川崎と姉妹都市・ボルチモアをつないだ35年間～

川崎市民の皆様、お元気でしょうか。私は4年前、前市長阿部孝夫氏より「川崎市名誉親善大使」の栄誉をいただきました、アメリカ・ボルチモアの中澤弘です。

姉妹都市35周年記念の「日本祭」

渡米し、おかげさまで57年になります。その間に、川崎とボルチモアが姉妹都市になり、今年で35年目です。私たち、ボルチモアの川崎委員会のメンバーはこれを記念して、4月13日(日)に「日本祭」を開催し、「川崎と日本」を改めて紹介いたしました。川崎市および川崎市国際交流協会が、川崎市に関する資料を数多く送って下さり、ボルチモア市民に川崎市の発展の現状を間近に見ていただくことができました。

さて、当日は晴天に恵まれ、来場者は当地タウソン大学の会場を埋め尽くし、私たちは超多忙でし

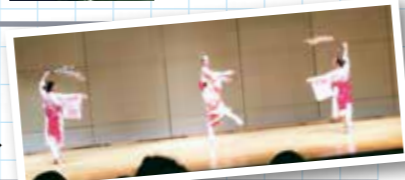
たが、今もボルチモア市民から感謝を受けております

当日は、ワシントンD.C.の日本大使館の山田参事官からご挨拶をいただき、ワシントンD.C.の桜まつりのため訪米していた、今年の「桜の女王」・小西千尋さんも来場し、立派な英語でスピーチされ、満場が湧きました。その会場のイベントは次の通りです。

- 柔道、剣道、空手
- クラシックバレエ、ダンス
- 活花、茶の湯(裏千家)
- 音楽(子どもたちのバイオリン、ピアノ)
- 日本舞踊
- オペラ「蝶々夫人」から的一幕「ある晴れた日に」
- 日本人形の作り方
- 子どもたちへの折り紙、習字、気功の実習
- 琴の演奏
- 東洋美術の展示

「続けること」の大切さ

私の仕事は主に司会でしたので、お世話になった方々にお会いでき、35年前の姉妹都市締結当時のことなどが心によみがえって感無量でした。当時の川崎市長・故伊藤三郎氏と当時のボルチモア市長・故シェファ氏の心と心が触れ合ったあの瞬間のことが



忘れられません。同時に「長く続けること」の大切さを、改めて強く感じました。1954年にエヴェレストを初登頂した英国のエドモンド・ヒラリー隊長が、「成功の半分は始めることで、半分はやり続けること。」と語ったことを、今また思い出しました。私たちの川崎、ボルチモア姉妹都市の今日までの輝かしい歴史を、若い世代が続けていけるようにさらなる努力が必要だと考えています。

「旭日小綬章」の叙勲

PS. 私事になりますが、春の叙勲により旭日小綬章を受けることになり、5月中旬日本に参ります。この上なき光栄です。これも皆様のお蔭と、心から感謝いたします。

(文・写真:中澤 弘さん)



ボルチモア市
人口:621,342人
(2013年現在)
面積:238.5km²

川崎市・ボルチモア市(アメリカ)姉妹都市提携35周年

川崎市民交流団募集

期間
2014年10月15日(水)～21日(火) (5泊7日)

問合せ・申込
(公財)川崎市国際交流協会まで電話・来館にて(～7月10日(木)締切)



平成25年度 調査結果報告

～外国人の暮らしを守る多文化共生のまちづくりに向けた調査・研究～

「外国人市民のための災害時支援のあり方」

(公財)川崎市国際交流協会は、母国と異なる文化やことばを理解し、日本で生活する外国人市民や、隣人として支えるすべての市民に役立つ協会でありたいと考え、さまざまな事業に取り組んでいます。

平成25年度は、災害時に向けた多言語情報(市内外)を比較・確認しながら、外国人市民のニーズを探り、災害時に活用しやすい多言語情報や医療情報支援について調査・研究事業を実施しました。事業には、当協会の災害時支援協力登録ボランティア、外国人支援団体代表者や外国籍の職員等が参加し、7回の調査・研究会議および調査(外国人市民に対するアンケート)を実施しました。

調査では、各言語の翻訳版と「やさしい日本語」版のアンケートを行いました。回答者の立場を考えたアンケート項目の量とことばの精査に努め、地震災害のない国出身の外国人市民にも理解できることば選びに気がつけました。また、アンケート記入時には、必要に応じて多言語での説明を付加できるよう、外国語が話せる職員が同席しました。

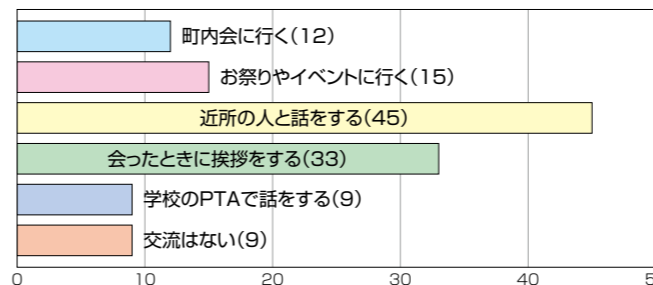
平成25年度の調査(アンケート)の結果見えてきたもの

- 現在提供されている多言語情報を精選して提供する必要がある。
- 外国人市民は、フェイスブック等のSNS(ソーシャル・ネットワーキング・サービス)による情報発信とともに、従来の紙ベースでの情報も欲している。
- 近隣の住人や日本人の友人との交流も多くみられることから、日本人を介しての正しい情報提供・共有が有効と考えられる。
- 医療に関しては、多くの外国人市民が「いざというときの拠り所」を欲している。

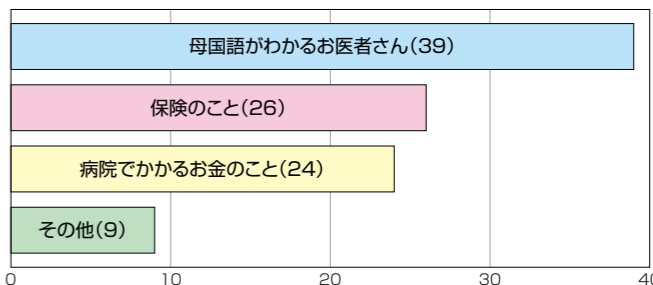
平成26年度は、アンケート項目をさらにわかりやすく改良し、広く調査して、今後の情報提供の内容や方法に役立てていきたいと思えます。

最後に、この調査・研究事業にご協力いただいた登録ボランティア、外部団体の皆様、アンケートに応じていただいた外国人市民(69名)の皆様にお礼申し上げます。

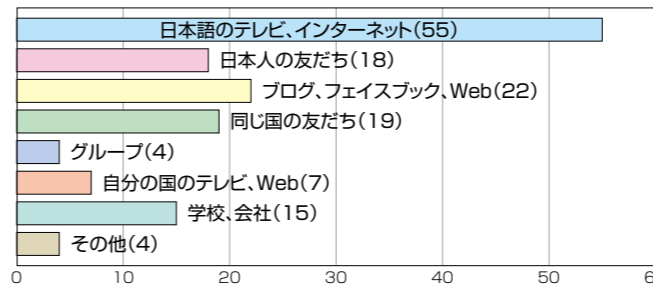
◆住んでいる町で日本人との交流はありますか。



◆病気・けがをしたとき、何が知りたいですか。



◆災害や避難のことは、どこから知りましたか。



◆情報はどのような形でほしいですか。

